

# 小・中学校国語科における交流学習を促進する手立てに関する一考察

水戸部 修治  
(教育学科教授)

小・中学校国語科における交流による学習の質を高めるための具体的な手立てについて、特に「読むこと」の学習におけるねらいの達成に向けたペア交流のモデル動画作成と活用を取り上げて検討した。まずモデル動画作成の意義と留意点を明らかにした。またそれを踏まえて、学習指導要領の〔思考力、判断力、表現力等〕「C読むこと」の指導事項をねらいとする学習における、モデル動画の制作と活用の在り方を、小学校第1学年及び第2学年から中学校第3学年まで、系統的に検討した。その結果、指導事項に対応したペア交流があること、それをモデル動画にする過程で具体化していくことが教材研究として大きな意味をもつこと、子供たちに視覚的に提示することが大きな効果を生むことを明らかにした。

キーワード：モデル動画，ペア交流，ロングレンジの学習活動，教材研究，国語科

## 1. 問題の所在

学習指導要領における「主体的・対話的で深い学び」や中央教育審議会の「個別最適な学び」と「協働的な学び」など、各教科等の学習で交流を通して学ぶことの重要性が指摘されている。国語科学習指導を対象とした先行研究においても、授業におけるペア交流の観察と分析から、子供たちの学びは質の高い交流を通して深まることが明らかになっている。<sup>1</sup>

しかし現状としては、授業にペアやグループあるいは学級全体での交流を位置付けてはいても、準備した考えを各々が説明するだけになったり、発言する子供が一部に限られたり、指導のねらいとは無関係な話し合いになったりする状況も散見される。

その原因は多岐にわたると考えられるが、その一つに、学習活動における目指すべき交流の姿が明確に描けていないことが挙げられる。具体的な原因には「指導者自身が、合意形成を図る話し合いに習熟しておらず、学習経験もほとんどないため、指導にイメージをもちにくいという問題」(萩中・米田, 2016)などが指摘されている。例えば学習指導案の本時の学習活動の

記載に、「自分の考えをもつ」、「考えを交流する」といった記述はあるものの、具体的にどのようなやり取りを目指すのかまでは想定されていないか、もしくは想定された記述があっても、「私は…」…だと思えます。わけは…だからです。」といった個人の見解を繰り返す形のみが想定されているケースも多く見られる。

こうした状況を打開する方策として開発が進められている指導の手立てにペア交流等のモデル動画の制作と活用がある。現在、共同研究を進める複数の学校の取り組みから、交流を促進する上で大きな効果があることが分かっている。しかし、まだその制作と活用における留意点等は整理されていない。

そこで本論考においては小・中学校国語科における交流学習を促進する手立てとして、ペア交流等のモデル動画の制作と活用を取り上げ、どのような点を押さえて制作・活用していくことが重要なのか、その系統性を踏まえつつ検討することとする。

## 2. モデル動画の制作と活用の意義

(1) 本論考で説明を目指すモデル動画とは

モデル動画とは、学習活動における交流や発信など、主に音声や動作を含む、学習のねらいに即した活動の在りようを、動画に収録して子供たちのモデルとして提供するものである。

モデル動画は大別すると、その内容として、単元の最終的なゴールとなる言語活動としての紹介や説明、解説や推薦などの発信の様子を収録するものと、その過程でのペアやグループでの協議の様子を収録するものとに分けられる。

本論考では、子供たちの学びを深める、学習過程におけるペア交流のモデル動画に焦点を当てて検討を進めていくこととする。また話し合う能力そのものの育成をねらうのではなく、ねらいに迫る学習方法としてのペア交流の在り方を明らかにするためのモデル動画の制作と活用方法を解明するため、小・中学校の「読むこと」の学習指導におけるモデル動画の制作と活用を分析・考察の対象とする。一例として挙げると、下記のようなシーンを収録するものとなる。

小学校第2学年物語文のモデル動画台本例  
 （児童A、Bの発話。（ ）内は具体的な所作。）

A1：一緒にやろう。

B1：うん。いいよ。（AとB共に空いている席に横に並んで座り、真ん中に本を開いて置く。）

A2：私が好きなのはここからここまでだよ。  
 （物語の好きな場面を指さす。）一緒に読もう。せーの……（A、B一緒に叙述を指さしながらAが好きな場面を声に出して読む。）

B2：なんで、そこが好きなの？

A3：だって、ここでこの子犬が、「うちにおいでよ、一緒にストーブに当たろう。」って言うてるよね。だから優しいなーって思ったから。

B3：確かに。この子犬優しいね。

A4：Bちゃんはどこが好きなの？

B4：私が選んだのは『フレデリック』だよ。  
 （ページをめくり）好きなのはここ！一緒に読もう。……（以下略）

本時の学習活動として位置付けた、選んだ物語の大好きな場面の理由を明らかにするための

ペア交流などの学習活動に際し、前掲のようなやり取りを収録した動画子供たちに提示し、ペア交流の具体的なイメージを明確にもてるようにすることをねらうものである。

「書くこと」の領域の指導においてはこれまでに、モデル文を用いた指導や研究が積み重ねられてきた。例えば松尾・松岡（2022）は、中学校第3学年の生徒を対象に、絵画の批評文をモデルとして用い、その特徴を踏まえて批評文の一部を書くことを通し、その有効性を検証している。この研究では、プロの批評家による批評文をモデル文例として示すことで、本来の批評文がもつ特徴を明確に押さえられるようにしている。

「書くこと」の実践等ではこうした実践や研究が積み重ねられている一方で、動画でのモデル制作は、先行実践及び研究はまだ少ない。

なお、モデル動画を用いた指導のバリエーションとして、前時までの子供たちのペア交流を動画撮影し、本時以降のペア交流のモデルとする工夫もあるが、本論考においては教師がモデルとなって制作するモデル動画に絞って考察を進めることとする。

## (2) 先行の実践と研究

こうしたモデル動画を用いた実践の先駆けとなるものとして、大村はまの「台本型手引き」の実践が挙げられる。この手引きは、グループでの話し合いの場における司会者と参加者の発話を具体的な形で示したものである。

甲斐（2016）によれば、大村の「台本型手引き」は、話し合いの展開が具体的な発話で示されている文字通りの台本型の形式（展開例示型）と、発言例には空欄や選択肢が設定され、自分たちの状況に即して手引きを用いながら話し合いを構成していくことができるよう話題の提示や発言に対する確認、質問等、話し合われるべきことなど、話題について発言する観点が示されている形式（観点提示型）とがあるとされている。更には、大村の中学校第1学年から第3学年までの3年間を通じた系統的な指導の中で台本型手引きの形式が変化していることに着目

し、「同じ台本型手引きでありながらその形式が変化した要因は、学習経験の蓄積に求められる。第三学年の段階では、展開例示形の手引きによって、発言の方法や話し合いの進行等は既習事項となっている。そのため、話し合いの進行方法や発言の仕方等を、具体的な展開例に即して指導する必要性は減じていくものと考えられる」としている。(p.85)

すなわち、子供たちが学習目的の達成に向けて自在に話し合うためには、その初期段階においては具体的な発話のやり取りの例示が必要であり、習熟に伴って自分たちの状況に即して手引きを用いながら話し合いを構成していくことができるよう、学習者の実態や指導の系統性への配慮がなされていることが分かる。

### (3) モデル動画の制作と活用のメリット

従来話し合う活動に際した指導の手立てとして、「私は……だと思います。わけは……だからです。」といった発言の型を例示する話型を用いた指導や「話し方名人」、「聞き方名人」など、話したり聞いたりする際のポイントをキーセンテンスとして列挙して示す指導などが行われてきた。ではこうした従前の指導に対してモデル動画を用いた指導はどのような点でメリットがあるのだろうか。

#### ① 動画による視覚的な提示を可能にすること

第1のメリットは子供たちにとって視覚的にモデルを提示できることである。話し合いの学習は対人コミュニケーションであり、空間的な状況に大きく影響を受ける。例えば「読むこと」の単元における学習活動の一環としてのペア交流であれば、対面で立って交流する場合と座って横に並び、机の真ん中に本を開いて置いて交流する場合とでは、交流の質は大きく異なってくる。こうした空間的な状況を全て言語化してポイントとして提示した場合、その項目数は非常に多くなってしまふのに対して、動画では視覚的にそれらが一目瞭然となる。また、大村の「台本型手引き」のような具体的な対話のやり取りを更に動画で提示できるため、口調や間合い、叙述をどのように指し示して交流するのかといった所作までも子供たちに具体的に提示す

ることができる。こうした特長を生かすことにより、子供たちにとって目指す学習の姿を一層具体的に視覚化して提示することが可能となる。大村の時代は動画撮影を日常的に指導に用いることは困難だった。しかし、GIGA スクール構想等の進展に伴い、一人一台端末が普及し、携帯電話端末などでも簡便に動画撮影して大型モニターで提示できるようになった現在では、大村の指導の理念と現代のICTを組み合わせた実践の工夫が、動画によるモデル提示という形になったとも言えるだろう。

#### ② 子供たちの多様な実態に合った提示を可能にすること

中央教育審議会教育課程企画特別部会の「論点整理」(2025)では、今後の教育課程の在り方の柱として、「多様性の包摂」が謳われている。例えば言語の情報処理において文字情報の理解に困難を抱える子供も、視覚情報や音声情報を併用することで支援することも可能となる。この点で動画によるモデル提示は、より多くの子供たちにとって有益な手立てとなると考えられる。

また小学校低学年において、モデル動画を活用した国語科「読むこと」の学習指導が行われた際、なかなか学習に集中できずにいた子供たちも、一斉にモデル動画に集中し、どのように交流すればよいのかを理解することができた事例も見られる。多様な学年・校種の多様な実態にある子供たちを念頭に置いたとき、モデル動画提示は大きな可能性をもつと考えられる。

#### ③ 教師の教材研究を促すこと

大村の「台本型手引き」は、大村が、目指す生徒の協議の在りようを精緻に把握していたからこそ作成できたものでもある。

モデル動画は、その制作の過程において、子供たちの具体のやり取りに加えて、指導のねらいに応じてどのような所作を伴うべきなのかも検討に迫られることとなる。前述のように、「読むこと」の学習活動としてペア交流を取り入れるのであれば、文章を共有しやすい体勢で交流を行う必要がある。更には指導事項に応じてどのように叙述を引用して話し合うのかも異なっ

てくる。

こうした交流の在り方を具体的に想定する教材研究を行うことで、子供たちの交流の質を高める指導を行うことが可能となる。

なお、教師のモデル提示として、モデル動画ではなく子供たちの目の前で演示することも考えられる。この方法と比較した場合、モデル動画は、子供に着目させたいねらいに迫る所作、例えば複数の叙述を指し示してそれらを結び付けて読む様子などをクローズアップして提示することが可能である点や、何度も繰り返して視聴できる点、一人一台端末に動画データを格納し、個別最適なタイミングで視聴できる点などがメリットとして挙げられる。

また教科書会社等による既製のモデル動画を活用することと比べて、教材研究を深めるという機能に関しては、モデル動画を自作することの意義は非常に大きいと考えられる。ペア交流のモデル動画制作であれば、一般的にはモデルとなるペアの2人と撮影者、計3名は撮影スタッフが必要となる。このことは必然的に、協働で教材研究を進めることをも意味する。ペア交流のモデル動画撮影を通して、一人では難しい授業の具体像の検討を、複数の教師が協力してより精緻に進めることの契機ともなる。

④教師の評価の精度を高め即時の支援を可能にすること

モデル動画制作によって生み出される派生的な効果として、教師のペア交流時における子供たちの見取りの精度の向上や即時の支援がしやすくなることが挙げられる。授業におけるペア交流に際して、机間指導によって子供たちの状況を見取り、瞬時に支援の声掛けを行うことは容易なことではない。しかし事前にモデル動画制作を通して、どのような所作が望ましいのか、どのようなやり取りが想定できるのかなどを検討することとなるため、子供たちの状況を見取り手立てを打つ際に、即座の支援がより容易なものとなる。

### 3. モデル動画制作上の留意点

前項のモデル動画のメリットを生かし、子供

たちの交流の質を高めるための留意点を検討していきたい。

(1) 明確な単元構想の下での学習指導が前提

モデル動画はそれ単体では効果を発揮しえない。あくまでも子供たちが必然性をもって交流する場があり、その際にどのように交流すれば目的をより良く実現できるかをつかみたいという意識が強い場合に真の意味のモデルとなるからである。国語科は学習指導要領の教科目標の冒頭に、「言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。」とあるように、言語活動を通して資質・能力を育む教科である。より具体的には、単元のゴールとなる言語活動に向かう中で資質・能力を身に付ける学習活動が行われることとなる。その学習活動の一つに交流がある。こうした単元を構想し子供たちがゴールとなる言語活動に向かう中で、目的や必然性を実感して交流できるようにすることが、モデル動画の機能を十分に発揮させるための前提となる。

(2) 指導のねらいや発達の段階を踏まえた具体化が必要

モデル動画を活用して行うペア交流は、あくまでも当該単元で育成を目指す資質・能力を確実に身に付けるための手立てとなるものである。そのため、読むことの学習活動としてのペア交流であれば、育成を目指す読むことの資質・能力、より具体的には当該単元で指導する読むことの指導事項に応じた具体化が必要となる。言い換えれば、モデル動画で提示する映像は、目指す読むことの資質・能力を視覚化し顕在化するものでもある。

(3) 自律的に学ぶための交流を重点的に位置付けた授業改善において活用することが必要

授業の展開の仕方は、指導のねらいや言語活動の特質、そして子供たちの実態に応じて様々な工夫されるものである。その中でもモデル動画を効果的に活用できるのは、単位時間の学習活動の中に重点的に交流を位置付けている場合である。短時間で教師が指定した相手と交流するのみの授業形態の場合は、モデル動画の指導

上の効果は極めて限定的になる。

あくまでも「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な実現を目指す中での学習の質を高めるための指導の手立てとして、モデル動画はその機能を十全に発揮することとなる。典型的には、単元のゴールとなる言語活動の遂行に向かって、本時の目当てを実現すべく、子供自身がその意図を明確にして相手を選んでペア交流を繰り返すような、いわゆるロングレンジの学習活動<sup>2</sup>において、子供たちにとってモデル動画は大きな意味をもつものとなる。

#### (4) 動画のメリットを生かした制作が重要

モデル動画のメリットとしては先述のようなことが挙げられるが、例えば着目した叙述を指さすといった、指導のねらいを端的に表す所作をクローズアップするなど、意図的なカメラワークも重要になる。更に動画でのモデル提示においては、ペアでのやり取りの口調も重要になる。従来の話型指導等においては、「私は……と考えています。その根拠として……が挙げられます。なぜなら……だからです。」など、改まった口調の例が示される場合が多かった。オフィシャルな場ではこうした口調が必要となる一方で、親密な間柄での相談や情報交換などを目的とした対話では、より日常会話口調でのやり取りが対話を促進する鍵となる。あくまでも相手や目的、場の状況等に応じた口調の例示が重要になる。

#### (5) 子供の実態や意識に応じた提示や活用の仕方の工夫が重要

モデル動画の制作が様々な形で工夫を凝らして取り組まれ始めている現在、多様なシーンを動画に盛り込むために、一般的に動画の時間が長くなる傾向にある。国語科の本時の学習指導において、ペア交流に先立って動画を視聴する際、その全てを提示してしまうと本来重要なペア交流の時間が圧迫されてしまうという矛盾が生じる。そのため、前時までの子供の実態に応じて、特に課題となるシーンを取り上げて視聴して、交流のポイントを端的につかむことができるようにするといった工夫が必要となる。

また大村の実践にも見られた通り、眼前の子

供たちの実態や学習経験を踏まえた具体化が重要なポイントとなる。

#### (6) 制作と活用の繰り返しでより質の高いものにしていく工夫が重要

様々な条件を考慮してモデル動画の制作にあたることとなるため、最初から質の高い適切なモデル動画を収録することは容易なことではない。モデル動画を活用した授業改善を継続していく中で、徐々に精度の高い動画にしていくというスタンスで取り組むことが重要になる。携帯電話端末や学習用一人一台端末の録画機能の普及により、動画撮影は日常的なものとなっている。まずは試してみるという心づもりで着手することが望ましい。

また、指導上の効果が大きいモデル動画ではあるが、全ての時間における交流の動画を制作することは極めて困難である。基本的には主に指導のねらいである指導事項が同じであれば、他の単元等でも類似の交流形態を準用することが可能である。そのため、特に重点とする単元を、年間指導計画を見通して選定し、その単元で用いたモデル動画を他の単元でも準用したり、身に付けた交流の仕方を活用できるようにしたりするといった工夫が重要になる。

#### 4. 系統性を踏まえた「読むこと」の学習指導におけるモデル動画制作の具体的ポイントと活用の在り方

前項までの検討を踏まえ、ここから具体的な制作と活用の在り方を、能力の系統と発達の系統の2つの視点から明らかにしていきたい。具体的には、(1)小学校第1学年及び第2学年を取り上げて、指導事項に応じた、すなわち能力の系統に応じたモデル動画の制作と活用の在り方を明らかにすることと、(2)小学校第1学年及び第2学年から中学校第3学年までの発達の段階に応じた系統的なモデル動画の制作と活用の在り方を明らかにすることの2つの視点から検討を進めることとする。

#### (1) 指導事項の系統に応じたモデル動画制作と活用のポイント～小学校第1学年及び第2学年を例に～

現行の学習指導要領の小学校国語科〔思考力、判断力、表現力等〕「C 読むこと」の指導事項は、「構造と内容の把握」、「精査・解釈」、「考えの形成」、「共有」の4つの系統で構成されている。ただし中学校は、「考えの形成」に「共有」が含まれて3つの系統となっている。ここでは小学校第1学年及び第2学年の指導事項を例に、

それぞれの系統ごとに、モデル動画の制作と活用に当たりどのような留意点が出てくるのかについて考察を進める。

これまでの実践を踏まえて、指導事項や想定される言語活動に応じたモデル動画制作および活用上の留意点を整理したものが次の表1である。

表1 小学校第1・2学年「読むこと」の指導事項の系統から見たモデル動画の制作と活用のポイント

系統	指導事項	想定される言語活動	モデル動画の制作と活用のポイント
構造と内容の把握（説明的な文章）	ア 時間的な順序や事柄の順序などを考えながら、内容の大体を捉えること。	・（第2学年）図鑑や科学読み物を読み、興味をもった植物やそのすごいところを紹介する活動。	・科学読み物を読んで見つけた興味をもった植物のページを開き、読む箇所を特定するシーンを撮影。 ・見出しやリードを読むシーンで指さして読む箇所をアップにする。（※4） ・相手の子供（子供役の教師、以下同様）は、「どんな植物？」などと尋ねて、その植物についてのおよその説明を求める。（※5）
構造と内容の把握（文学的な文章）	イ 場面の様子や登場人物の行動など、内容の大体を捉えること。	・（第2学年）お気に入りの物語の内容や好きなどころを、まだ読んでいない人に紹介する活動。	・誰が、どうして、どうなったかなどが分かるページをめくって、内容の大体を説明するシーンを撮影。 ・相手の子供は「どんなお話なの？」などと質問して、内容の大体の説明を促す。（※6）
精査・解釈（説明的な文章）	ウ 文章の中の重要な語や文を考えて選び出すこと。	・（第1学年）乗り物の図鑑を読み、好きな乗り物の仕事にぴったり合ったつくりなど、すごいところを紹介する活動。	・仕事にぴったり合ったつくりについて「私が選んだ乗り物は〇〇だよ。特にすごいところはここ。一緒に読もう。」などと、乗り物のすごいところを説明する上で重要な語や文を特定して読むシーンを強調。（※7） ・相手の子供は「どうしてそこがすごいと思ったの？」などと、重要な語や文を用いてすごいと思った理由を説明することを促す。
精査・解釈（文学的な文章）	エ 場面の様子に着目して、登場人物の行動を具体的に想像すること。	・（第1学年）大好きな昔話のお気に入りの場面で登場人物が話していることを、お話吹き出しを使って想像して紹介する活動	・お気に入りの場面を二人で指さし、一緒に声に出して読んだ後、相手の子供は「なんて言っていると思うの？」などと問い、説明者側の子供が白抜きの吹き出しのカード（お話吹き出し）を当ててその場面の会話を具体的に想像していく様子を撮影。（※8）
考えの形成	オ 文章の内容と自分の体験とを結び付けて、感想をもつこと。	・（第2学年）お話の好きなどころの理由を、自分の体験と結び付けて説明する活動	・好きな場面を一緒に声に出して読み、その理由を「自分も…したことがあって」などと体験と結び付けて説明する様子を撮影。（※9） ・体験と結び付けた理由を説明する際には、

小・中学校国語科における交流学習を促進する手立てに関する一考察

			体験した主体である説明する子供の表情を映すが、叙述を指さして読むシーンを交互に入れる。撮影位置は2人の後方からではなく、斜め前から。(※10)
共有	カ 文章を読んで感じたことや分かったことを共有すること。	・(第2学年)同じ物語を読んでいる友達とペアになり、お話の面白いところや想像したことなどを伝え合う活動。	・オと同様に、ペアの斜め前から撮影し、叙述を指さして説明するシーンと説明する子供の表情とを交互に映し出し、共有する様子を表現。(※11) ・日常会話口調に加えて、「それ聞いて私も思ったんだけど、」など、やり取りによるリアルタイムの読みの表出を意図的に例示。
<p>[共通の留意事項]</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ペアを組んだら横に並んで座り、先に説明している子供の本を真ん中に開いて置くシーンをアップで強調する。その際、二つの机はびたりと付けた状態とする。(※1)</li> <li>・指さして読む際には、「一緒に読もう」などと声をかけて、二人で叙述を確認して声に出して読むシーンを収録。オ、カの指導事項をねらいとする場合以外は、基本的には二人の後方から指さしている箇所をアップにして撮影し、叙述を確認しながら交流する様子を強調。(※2)</li> <li>・一方的に説明する形ではなく、尋ねたり応答したりするなど、対話のモデルとなるようにする。</li> <li>・対話の口調は、日常会話口調となるようにする。(※3)</li> <li>・並行読書マトリックスなど、相手を判断する手掛かりを活用するシーンを冒頭に入れてもよい。その際は、「まだちょっと自信がないから、同じ本を選んでいる人と交流しよう。」などといった発話のシーンを入れて判断の例を示す。</li> <li>・必要に応じてテロップ等を入れ、ポイントや発話内容を明示してもよい。</li> </ul>			

この表1には、「系統」として指導事項の系統を、「指導事項」として当該の指導事項を記載している。また「想定される言語活動」として、その指導事項を指導するのにふさわしい典型的な言語活動を例示している。そして「モデル動画の制作と活用のポイント」として、想定される留意点等を記載している。なお、それぞれの指導事項に共通する留意点を表の下部に記載している。

表1からは各指導事項を通じて留意する点（[共通する留意事項]）と、それぞれの指導事項に固有の留意点があることが分かる。表中に※を付した主なポイントについて補足すると以下の通りである。

① [共通する留意事項] について

表1下部に示した※1のように、動画ではペア交流の際の空間的な状況を明示する。立ったままでの交流では、叙述を指し示しにくく、相

手と文章を共有しづらいなどの理由から読むことと能力を十分に育成できないため、ペアを組んだら空いている席に座って交流するといった所作を提示する。また※2のように、指さして叙述を確認しながら交流する様子を明確に提示する。その際、カメラワークとしてペアの背後から撮影し、叙述を指さしているところをアップにする。こうした手立ては、絵や写真のみに着目して本文から離れた対話交流に陥ることを避けることを意図するものである。

モデル動画の開発当初は、ペアの前方から撮影することが多かったが、その方向からの映像では、叙述を指さしている様子を強調できない。その結果、子供たちの交流でも叙述を確認しない交流が多く見られる傾向にあることが分かってきた。そのため、現在ではペアの背後に回って2人の真ん中から撮影することが多くなっている。

対話口調については、開発当初は比較的固い口調が多かったが、そのモデル提示では子供のやり取りが形式的になりがちであった。そこで親密な間柄でのペア対話であるという状況を踏まえ、※3のように可能な限り児童が日常的に会話する口調を用いて例示することとしている。

#### ②「構造と内容の把握」について

小学校第1学年及び第2学年の構造と内容の把握の指導事項は、説明的な文章と文学的な文章の2つが示されている。

説明的な文章の構造と内容の把握の指導事項は「ア 時間的な順序や事柄の順序などを考えながら、内容の大体を捉えること。」である。また文学的な文章では「イ 場面の様子や登場人物の行動など、内容の大体を捉えること。」である。いずれも内容の大体を捉えて読む能力を映像で提示することがポイントとなる。そのため、アでは科学読み物の見開きの「見出し」や「リード」を確認する様子を強調する。（※4）こうした箇所に「内容の大体」が説明されていることが多いからである。また相手の子供の尋ね方として「どんな植物？」と尋ねることで、説明役の子供がその植物を概説することを引き出せるようにすることもポイントとなる。（※5）これに対してウをねらう場合は、「（その植物の）どこがすごいのか？」といった問いかけをすることとなる。

イでは、「内容の大体を捉える」ことが「誰が、どうして、どうなったか」などを大づかみに把握することであることを踏まえ、それらが分かるページを挿絵などを手掛かりにめぐって説明する様子を収録する。また※5と同様に相手の子供が「どんなお話なの？」と尋ねることで、物語の内容の大体を説明することを引き出していく。（※6）

#### ③精査・解釈について

小学校第1学年及び第2学年の精査・解釈の指導事項は、説明的な文章と文学的な文章の2つが示されている。

説明的な文章の構造と内容の把握の指導事項は「ウ 文章の中の重要な語や文を考えて選ぶこと。」である。また文学的な文章では「エ

場面の様子に着目して、登場人物の行動を具体的に想像すること。」である。ウの指導の場合、子供自身が着目した「文章の中の重要な語や文」を指し示して説明する様子をアップにする。（※7）その際、写真などだけを指し示す映像にならないよう留意する。

またエの場合は、お話吹き出しを絵に当てて会話を想像する様子に加えて、頻繁に元の文や文章を指し示して声に出して読み、引用しながら説明する様子を映像化する。（※8）

#### ④考えの形成について

小学校第1学年及び第2学年の精査・解釈の指導事項は、「オ 文章の内容と自分の体験とを結び付けて、感想をもつこと。」である。対話例としては、※9のように、体験と結び付ける典型的な言い回しである「自分も……したことがあるから」といったものを意図的に例示する。また「構造と内容の把握」や「精査・解釈」と異なり、結び付ける体験の主体である子供の表情をより重点的に映し出すこととなる。ただし、文章から離れた体験談のやり取りに終始しないよう、叙述を指さして読むなど、叙述を引用して交流しているシーンを交互に入れた映像とする。（※10）

#### ④共有について

共有の資質・能力は、他者の読みとの関わりで自らの読みを問い直す力でもある。そこでペア交流の場合は、2人のやり取りを表情と共に映し出すといった工夫が考えられる。ただしここでも※10と同様に、頻繁に叙述を指さして引用して交流する様子を併せて強調する必要がある。（※11）

#### (2) 発達の段階に応じたモデル動画制作と活用のポイント

ここからは、小学校第1学年及び第2学年から中学校第3学年までの発達の段階に応じたモデル動画のポイントを検討していく。なお、「読むこと」の中でも特に発達の段階に応じた特徴が顕著な「精査・解釈」の指導事項を取り上げることとする。<sup>3</sup>

各学年のポイントをまとめたものが次の表2である。

小・中学校国語科における交流学習を促進する手立てに関する一考察

表2 「読むこと」「精査・解釈」の指導における発達の段階によるモデル動画の制作と活用のポイント

学年	指導事項	想定される言語活動	モデル動画の制作と活用のポイント
(小学校第1学年及び第2学年は表1に同じ。)			
小学校 第3学年 及び 第4学年	ウ 目的を意識して、中心となる語や文を見付けて要約すること。	・興味をもった科学的事象について、要約してその仕組みなどを説明する活動	・科学読み物などの資料について、目次や索引を使って必要なページを特定する様子を撮影。※12 ・説明役の子供は、最も伝えたいことを述べた上で、その内容を説明する上で中心となる語や文を、複数ページに渡って指摘し、それらを、ページをめくりながら口頭でつなげて要約してみる検討の様子を収録する。(※12)
	エ 登場人物の気持ちの変化や性格、情景について、場面の移り変わりや結び付けて具体的に想像すること。	・心に残る物語の印象に残るシーンとそのわけを紹介する活動	・印象に残るわけを明らかにするためのペア交流において、印象に残った場面の前の場面や後の場面から理由となる場面を見付けて、ページをめくって説明する様子を収録。(※13) ・相手役の子供が「どうしてそこが印象に残ったの？」などと尋ね、説明役の子供は、「えーっと、前の場面では……だったのに、ここでは……だから。」などと説明するやり取りを強調。(※14)
小学校 第5学年 及び 第6学年	ウ 目的に応じて、文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見付けたり、論の進め方について考えたりすること。	・課題意識をもつて複数の文献から必要な情報を集めて考えを発信する活動	・課題に関わる複数の情報を組み合わせて説明するため、複数の文献を交互に開いて用いたり、更に新たな文献をブックトラックに取りに行き、情報として付け加えて説明したりする様子などを提示。(※15) ・どちらの資料を選ぶか迷っている、といった相談するためのペア交流を強調。
	エ 人物像や物語などの全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりすること。	・物語の魅力を推薦する活動	・当該の作品の色々な叙述を、ページを開いて結び付けて説明したり、後書きなどの文章を用いて、推薦理由をはっきりさせたりしていく様子を提示。(※16)
中学校 第1学年	ウ 目的に応じて必要な情報に着目して要約したり、場面と場面、場面と描写などを結び付けたりして、内容を解釈すること。	・説明すべき内容を文章から見付け、要約して説明する活動	・要約の目的に応じて、どの叙述をどう用いるかを相談するシーンを収録。自分が何を説明したいのかを相手に伝えた上で、資料の叙述を用いて口頭で要約する様子を強調。(※17)
	エ 文章の構成や展開、表現の効果について、根拠を明確にして考えること。	・作品がもつ魅力について、効果的な表現の工夫などに着目して解説する活動	・当該の作品に関連する作品や作者の情報なども参考にして、作者特有の表現の魅力などについてその良さを解説していくシーンを収録。

中学校 第2学年	イ 目的に応じて複数の情報を整理しながら適切な情報を得たり、登場人物の言動の意味などについて考えたりして、内容を解釈すること。 ウ 文章と図表などを結び付け、その関係を踏まえて内容を解釈すること。 エ 観点を明確にして文章を比較するなどし、文章の構成や論理の展開、表現の効果について考えること。	・文献情報を読んで集めた情報を活用し、出典を明らかにしながら、考えたことなどを提案する活動	・自分が提案するための提案理由や提案内容等を具体化する資料を複数集め、資料の出どころの確かさなどを考慮し、どの資料を用いるかを検討し合うシーンを収録。机上に複数の資料を開いて置き、それぞれの叙述を指摘しつつ相手にもそれを示して、交流相手が文章を読んで確認した上で意見を述べる様子を強調。（※18） ・検討の際、自分の提案の趣旨を相手に伝えた上で、資料の妥当性について、そこに含まれる図表との関係なども踏まえて相談する様子を強調。
		・小説などを読み、引用して解説したり、考えたことなどを伝え合ったりする活動	・文章中に見出した登場人物の言動の意味を、他の場面での言動と関係付けたり同一作家の他の小説の類似の場面を結び付けたりして考え、作品の魅力を解説するシーンを収録。 ・同一作家の作品を読み比べるなどして、作家に特有の展開の仕方などを取り上げて展開の効果を解説するシーンを例示。（※19）
中学校 第3学年	イ 文章を批判的に読みながら、文章に表れているものの見方や考え方について考えること。 ウ 文章の構成や論理の展開、表現の仕方について評価すること。	・論説や報道の文章を比較するなどして読み、理解したことや考えたことについて討論したり文章にまとめた活動	・共通テーマに関して、それぞれに収集した情報について検討し合い、文章に表れているものの見方や考え方、論理の展開などを踏まえて評価し合うシーンを収録。 ・書きまとめに際し、「つまりこういう整理でいいよね。」などと確認するシーンを強調。（※20）
		・小説を読み、批評する活動	・当該の小説の具体的な叙述を指摘しつつ、後書きや作家の情報に関する文献なども関連付けて評価し合うシーンを収録。
〔共通の留意事項〕			
<ul style="list-style-type: none"> <li>・一方的に説明する形ではなく、尋ねたり応答したりするなど、対話のモデルとなるようにする。</li> <li>・対話の口調は、相談や検討、文章化するに当たっての確認など、その目的に合った会話口調となるようにする。</li> <li>・ペア交流形態を想定しているが、実際の学習形態に合わせて、グループ協議などの形にしてもよい。</li> <li>・必要に応じてテロップ等を入れ、ポイントや発話内容を明示してもよい。</li> </ul>			

発達の段階に応じた指導に配慮する視点から補足すると、小学校第1学年及び第2学年では、文章中の単一の叙述に着目するシーンを強調（表1※7, 8）するのに対して、第3学年及び第4学年では複数の叙述を結び付けるシーンを強調する。（※12, 13）また具体的な発話も、場面の移り変わりや気持ちの変化を端的に表す

言い回しを例示する。（※14）第5学年及び第6学年では更に複数の文献を用いて解釈するシーンを収録する。これは、指導事項ウに示す「目的に応じて、」「必要な情報を見付ける」際の具体的な読書行為を例示するものである。（※15）また指導事項エに示す「物語の全体像」を「具体的に想像」する手掛かりの一例として後書き

を参照する様子を例示するなどの工夫も考えられる。(※16)

中学校ではより意図を明確にした交流のモデルを例示する。そのため、自分の目的を相手に示した上で交流する(※17)様子や、目的に照らしてどちらがより適切かを相談(※17)したり検討(※18)したりするやり取りを例示していく。

※19では、指導のねらいとする「論理の展開」について考える際の一例として、同一作家の作品を読み比べることを例示している。論理の展開について考える際には他にも様々な読み方が想定できるが、中学校第2,3学年では逐一の例示ではなく、代表的なものを提示し、既習学習を生かして子供たちが具体的に学習を進められるようにモデルを提示する。※20もあくまでも例示にとどめるが、交流の目的である「文章に表れているものの見方や考え方」を明確にすることを意識して自在に話し合いを進めていくことができるようなモデル提示となるよう留意する。

## 5. まとめ

ペア交流のモデル動画は、交流の質を高めるための手立ての一つである。開発当初は交流に当たっての複数の留意点を子供たちと視覚的に共有するための手法として用いたものであったが、子供たちの主体的で自律的な交流を引き出すための手立てとして大きな可能性をもつことが分かってきた。

ただし、その効果を発揮するには第1に、授業者自身がモデル動画の意図を明確に押さえて用いることが前提になる。意図が不明確なまま手立てを取り、効果があまり得られずにその手立てが用いられなくなっていった実践は数多い。形式的に動画を用いなければならないという理解の下での実践では準備の負担ばかりが大きくなってしまふ。

本論考では、更なる実践の広がり礎となるべくモデル動画の制作と活用の在り方の整理を試みたところであり、モデル動画活用のメリットを押さえた上での実践が重要になると考えて

いる。

第2には、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な実現や、多様性の包摂を志向する、今後一層求められる学習指導の改善の中でこそ機能するということである。子供たちが自らの、あるいは互いの課題解決のためにより良く交流したいと思えばこそモデル動画が必然性をもって子供たちの学びの支えとして生きて働くものとなる。またそのためには、授業構想自体が子供主体の自律的に学びを調整できるようなものであり、子供たちの目的意識や必然性を実感できる交流を重点的に位置付けたものとする必要がある。教師が一斉学習場面で発問を続ける指導や、教科書「を」教える指導に終始するのであれば、子供たちが交流を通して深い学びに至ることは難しくなるし、モデル動画もなくてよいものとなってしまふ。

第3には、実践の繰り返しによる知見の積み重ねによって、様々な局面に応じた手立てになるということである。本論考は、これまでに取組みられてきたモデル動画を活用した実践を念頭に置いて整理を図ったものであるが、もちろんすべてのケースを網羅できているわけではない。今後より多様な局面での実践開発が求められる。

その際、必ずしも最初から完成度の高い動画制作を目指す必要はない。授業実践と同様に、日常的な実践と改善の積み重ねが極めて重要なものとなる。動画撮影はコロナ禍以前と比較して極めて学習の中に取り入れやすくなった。そうした簡便さを生かした日常的な取り組みが大切になる。

モデル動画を活用した実践が今後一層広がっていくことで、多様な実態にある眼前の子供たち一人一人の具体的な学びの姿を十分に念頭に置いた実践展開も可能となるものと考えている。

## 注

- 1)本論考に先立つ検討(水戸部,2025)では、ペア交流の繰り返しを通して、子供がより確かな読みを進めていく過程を明らかにしている。
- 2)ロングレンジの学習活動とは、「子供たちが魅力

的な言語活動のゴールに向かい、ゴールイメージや解決方法などの見通しをもって、学習活動等を選んだり決めたりするなど試行錯誤しつつ、自律的に判断して学習活動を進めるための一定程度の長い時間を確保した柔軟な学習活動の枠組」である。（水戸部，2023）特定の型にはめた学習の姿ではないが、一例としては、子供たちが本時の目的（例えば物語の大好きなところを紹介することに向けて、好きなわけをはっきりさせるなど。）を実現するために、相手を選んでペア交流を20～30分程度繰り返し、好きなわけを明確にしていくといった学習活動が想定される。

- 3)平成29年版の小学校及び中学校の学習指導要領・国語の〔思考力、判断力、表現力等〕「C読むこと」の「精査・解釈」の指導事項は、小学校では説明的な文章に関する事項と文学的な文章に関する事項とに分けて示されている。一方中学校では、内容面に着目した精査・解釈の事項と、形式面に着目した精査・解釈の事項とに分けて示されている。表2では、各学年で想定される言語活動を説明的な文章と文学的な文章の例を各1例ずつ示し、それに応じたモデル動画の制作と活用の際の配慮点を書き出す形式を採った。

#### 引用文献

- 甲斐伊織（2016）「大村はま国語教室における台本型手引きの変化からみる話し合い指導の系統—単元「クラスの歌を作る」の復元—」.『全国大学国語教育学会 国語科教育』,第80号,pp.79-86
- 中央教育審議会（2025）「教育課程企画特別部会 論点整理」
- 萩中奈穂美・米田猛（2016）「合意形成を図る話し合いの指導に関する実践的研究」.『富山大学人間発達科学部紀要』,第11巻第1号, pp.39-55
- 松尾澄英・松岡礼子（2022）「中学校国語科における批評入門単元の開発」.『大阪教育大学紀要 総合教育科学』,第70巻, pp.321-334

#### 謝辞／付記

本研究は、JSPS 科研費 24K06039 の助成を

受けた研究成果の一部です。またこれまでの共同研究の中でモデル動画制作に取り組んでいただいた数多くの実践者の皆様に、深く敬意と感謝の念を記す次第です。